

## H.v.Kleistの『ロカルノの女乞食』試論

—MitleidenとGewaltを中心にして—

南 勉

### 序

当該作品は、作者クライストが自ら発刊する『ベルリント刊新聞』に1810年10月11日に発表された。その後この初稿は若干の修正を施されて、物語集第2巻に収められた。クライストは当該作品を、彼の友人E.v.Pfuelの兄弟であるFriedrichが経験した幽霊物語に依拠して執筆したと言われている。(1)

この物語の筋は実に不気味である。北部イタリアの町ロカルノの近くに美しい居城を持つある侯爵は、狩猟から帰って来た時銃の置き場にしていた部屋に、ある年老いた病気の女乞食がいるのに気がついた。女乞食は、侯爵夫人の好意によって藁床の上に寝ていた。侯爵は、女乞食に起きて暖炉の後へ行くように命じる。彼女は命令に従って行動し、呻きあえいで暖炉の後で倒れそのまま死去する。数年後、財政事情が悪化した侯爵のもとに一人のフィレンツェの騎士が現われ、城の購入を申し入れる。侯爵は商談にのり気になり、騎士を例の部屋に宿泊させる。ところが騎士は深夜、部屋に幽霊が出ると断言する。この結果多くの買手が尻込みし、奇しくも家僕の間にも噂にのぼるようになった。困った侯爵は、噂を打ち消すべく自ら調査をするが、意に反して騎士の断言が事実であることを確認する。奇怪な物音は、数年前女乞食が死去した時の物音に酷似しているが、侯爵はそれに気づかない。最後の調査の際、侯爵は同じ物音を体験し、完全に理性を失って城に火を放ち悲惨な死をとげる。

以上が作品のあら筋であるが、原文でわずか3ページほどの小品であるにも拘らず、内容的にはかなり密度の濃い珠玉と言えよう。ドイツ文芸学の泰斗E.シュタイガーは、様式論的な観点から当該作品に関する草分け的な研究論文を起草している。シュタイガーの分析は精緻を極め実に説得力があり、またその該博な知見には圧倒される。シュタイガーは論文の冒頭部分で、「この物語において深い意味は問題ではないということを確認するために、ただ内容を冷静に要約するだけでよい」(2) と述べ、鋭い様式論的な分析を展開した後、この作品

において読者の心をうつものは「仮借ないまでに一貫した劇的な形式そのもの」であり、「素材は大道芸人が好んで持ち出すような恐い話にすぎない」<sup>(3)</sup>と結論づけている。シュタイガーの論は一貫しているために非常に説得力があるのだが、果して文学作品が一貫した形式によってのみ読者に感動を与えると断言できるのだろうか。むしろ形式と内容とがバランスよく一体化してはじめてその作品は本来の意味をなすのではなかろうか。このような観点から、本稿においては作品の内容を中心に考察を試みたい。

ところで本稿の構成は以下の通りである。Ⅰにおいて、まず侯爵の地位と立場を明確に位置付け、彼の発想を分析する。次に侯爵夫人の発想を分析し、夫妻の発想の相違を明らかにする。更に女乞食の実相を細かく検討し藁床の象徴的な意味を明析にすることによって、作品中に漂う死臭と侯爵の不覚の過誤について考察する。Ⅱにおいて、まず侯爵の状況の変化について考察する。次に奇怪な物音の描写を、フィレンツェの騎士と侯爵の受けとめ方の相違に注目して考察する。これらを踏まえて、侯爵の一貫した目的意識を解明する。Ⅲにおいて、まず侯爵がなぜ悲惨な死に至るのかを解明する。次に妻の対応、夫との相違について検討する。そして最後に、作品に冒頭から漂っている死臭と藁床の象徴性、主人公の世界の崩壊の相を総合的に考察してみたい。

## I

当該作品の舞台は、北部イタリアのロカルノである。作品中に時代についての具体的な記述はないが、内容から16～7世紀と推測される。この作品において、登場人物の名前は全く叙述されていない。登場人物は、全て地位や身分、立場をあらわす言葉で語られている。主要な登場人物は、侯爵、侯爵夫人、フィレンツェの騎士、それに女乞食である。女乞食を別にすると、他の登場人物は貴族階級の人々である。女乞食は最下層に属している。この著しい対照は、これだけでも不可解であり微妙な緊張をかもしている。

貴族を代表する侯爵は、狩猟を趣味とし、剣と銃を所持している。彼の武器は強さを証明し、彼はまた獵士として動物界の支配者である。<sup>(4)</sup> また貴族としての称号は、領地と領民の支配者をも意味する。彼は、自己の領地で絶大な権力を誇っている。彼は、城内において夫人や家僕、そして突然侵入してきた女乞食に対して何ら疑念もなく厳命を下す。侯爵の絶大な権力の典型的な象徴は、

美しい城である。この城は、幾多の騎士たちが購入を申し入れるほど「美しいたずまい」<sup>(5)</sup>をなしている。また侯爵が銃の置き場としている部屋は、「床にみがきがかけてあり」<sup>(6)</sup>、女乞食が杖をすべらせるほどである。この部屋はただ単に立派であるだけでなく、後には「美しく立派にしつらえられて」<sup>(7)</sup> 来客のための客室として機能している。城は侯爵の高い地位の符牒であり、彼は城と一体をなしている。<sup>(8)</sup> 侯爵の絶大な権力は、彼の意識を強く規定している。領地と城において、全てが侯爵の考えるがまま進行する。彼は、自己の価値判断に依拠して命令を下す存在であり、自己の判断に疑念をもつ必然性は全くないのである。

侯爵の世界は華麗でにぎにぎしく、また名声と力に溢れているが、ここに唐突に身分不相応な最下層に属する女乞食が侵入してくる。

——; ein Schloß mit hohen und weitläufigen Zimmern, in deren einem, auf Stroh, das man ihr unterschüttete, eine alte kranke Frau, die sich bettelnd vor der Tür eingefunden hatte, von der Hausfrau aus Mitleiden gebettet worden war. (s.196)

(訳)

城には天井の高い広々とした部屋があり、その一室に、門前にあらわれた物乞いの一人の病気の老いた女が、夫人の同情を買って敷いてもらった藁の上に寝かされていた。

城の素晴らしい一室に侵入してきたのは物乞いの女であり、しかも病身の老婆である。これは、実に不気味な事実である。この老婆は、壮年で力に溢れ絶大な権力をもつ侯爵と対比すると老醜の極であり、まさに侯爵の対極である。老婆は、藁の上に寝かされている。藁の床は、臨終の床である。<sup>(9)</sup> この女乞食を城に入れたのは、いみじくも侯爵夫人である。侯爵夫人は、女乞食の弱さと老醜に対していささかも嫌悪感をあらわさない。それどころか、彼女は瀕死の老婆に対して外からの援助が必要だと判断している。夫人は、この意味において貴族の立場を超越している。原文引用に „Mitleiden“ という語があるが、この語は他者と同じ苦しみを同時に堪え忍ぶという意味である。<sup>(10)</sup> つまり、困っている他者に対する同情と配慮のことである。侯爵夫人は „Mitleiden“ の人であり、これが彼女の特性である。彼女は貴族としてではなく、主婦—Hausfrau—

として行動している。(11) 彼女の行動原理は „Mitleiden“ であり、立場は主婦であって決して貴族でない。これは、侯爵と夫人との決定的な相違である。彼女は、権力や地位とはおよそ無縁の世界に住んでいる。

他方侯爵は病気の女乞食に対して一切配慮せず、「狐からもどってたまたま銃をしまうことにしている部屋に入室し、部屋の一角に横になっている老婆に向かって不興気に、起き上がって暖炉の後へ行け」(12) と命令する。これは、明らかに彼の暴挙—Gewalt—である。命令を下す存在として、彼はいつもと同様何の疑念もなく厳命を下しているが、彼のこの行動は不覚の過誤である。彼は、権力の符牒である銃の置き場が弱さと病氣と老いの化身によって占められたことに、本能的な不安と不快を感じている。彼にとって、他者の生命よりも自身の権力と地位の方がはるかに大きな意味をなしている。このために、彼は病身の女乞食が人間的な世話に値しないと無意識裡に思っている。(13) 侯爵は、この意味において典型的な貴族であり、„Mitleiden“ とは無縁の世界に住んでいる。彼の行動は、自己の権力と地位の保全という目的で一貫している。彼は強い目的意識によって、それとは意識せずに „Gewalt“ を行使する存在である。侯爵は夫人とは意識と行動に関して異なっている。二人は表向き同じ立場にこそあれ、内的には全く孤立しているのである。

侯爵の権力は目下絶大であり、その命令は絶対的である。弱い存在は、その前に屈従せざるをえない。女乞食は、その命令に従った結果あえなく他界する運命にある。

Die Frau, da sie sich erhob, glitschte mit der Krücke auf dem glatten Boden aus, und beschädigte sich, auf eine gefährliche Weise, das Kreuz; dergestalt, daß sie zwar noch mit unsäglicher Mühe aufstand und quer, wie es vorgeschrieben war, über das Zimmer ging, hinter den Ofen aber, unter Stöhnen und Ächzen, niedersank und verschied. (s.196)

(訳)

老婆は立ち上がろうとした時、なめらかな床の上で杖をすべらせて転んでしまい、したたかに腰をうった。しかし名状し難い苦勞をして何とか立ち上がり、指示された通り部屋を横切って暖炉の後に行くには行ったが、あえぎ呻いてくず折れてしまい、そのまま身罷ってしまった。

女乞食は弱さと病気と老いの化身であり、放っておいてもじきに死去する運命にある。しかし、侯爵は老婆のこのような状況を認識していないために、結果的に彼女の死期を早めている。これは、彼の „Gewalt“ に基づく罪である。あまりに目的意識が強いために、侯爵はこの事実に気づかない。女乞食の死は、侯爵にとって家畜の死に等しいと言っても決して過言ではない。ところが詩人の炯眼は、侯爵の不覚の過誤を決して看過しない。原文引用に „verscheiden“ という語が、過去形で用いられている。この語は病気による死を意味している。<sup>14)</sup> 女乞食の死はアッという間の出来事であり、あまり大きな苦痛を伴わない。短かく苦痛の少ない死は、女乞食にとってせめてもの救いであるが、後の侯爵の苦痛に満ちた死と対比すると実に対照的である。

## II

女乞食の死後の数年についてテキストには何も記されていない。しかし侯爵は数年後、「戦乱と凶作のためにひどい財政状態に陥って」<sup>15)</sup> しまう。これは、侯爵にとってきわめて厳しい現実である。その原因は、戦乱と凶作であり、これらは何人のいかなる能力をもってしてもにわかには予見し難い運命的な要因である。財政基盤の弱体化は、侯爵の地位と権力の低下を意味している。女乞食に厳命を下していた時の権勢は、今の侯爵にはない。かつてとは異なり、運命が転変して侯爵に „Gewalt“ を行使しているかのようである。財政事情がとても悪化したために、あるフィレンツェの騎士が城の購入を申し入れた時、侯爵は渡りに舟と言わんばかりに商談に応じる。かつて城は侯爵の高い地位の符牒であり、侯爵と強く一体化していた。しかし、侯爵は今城を手放そうとする。彼のこのような対応は、かつての権力と栄光の否定である。以前の力強さと威光は、ここでは一切影をひそめている。

侯爵は、城の購入を希望するフィレンツェの騎士を件の部屋に宿泊させるが、深夜予測だにできない不可解なことが出来る。

Aber wie betreten war das Ehepaar, als der Ritter mitten in der Nacht, verstört und bleich, zu ihnen herunterkam, hoch und teuer versichernd, daß es in dem Zimmer spuke, indem etwas, das dem Blick unsichtbar gewesen, mit einem Geräusch, als ob es auf Stroh

gelegen, im Zimmerwinkel aufgestanden, mit vernehmlichen Schritten, langsam und gebrechlich, quer über das Zimmer gegangen, und hinter dem Ofen, unter Stöhnen und Ächzen, niedergesunken sei. (s.196)

(訳)

しかし例の騎士が真夜中に錯乱し蒼白になって駆け下りてきて、「部屋の中には幽霊が出る。目に見えない何かが、まるで藁の上に横になっているような物音を立てて部屋の一隅で起き上がり、はっきりと聞こえる音を立ててのろのと弱々しく部屋を横切り、あえぎ呻きながら暖炉の後でくず折れた」とおごそかに断言した時、侯爵夫妻はどんなに狼狽したことだろう。

例の部屋には騎士以外に誰もいない。ましてや客室として機能している立派な部屋に、藁の床を敷いているはずもない。しかし、藁を踏む音がし、目に見えない何かがはっきりと音を立てている。これは、全く不可解でまことに不気味な現象である。この報告は、第三者によってなされている。フィレンツェの騎士は、物故した病身の女乞食とは無縁の赤の他人である。騎士の報告は、杖をすべらせて転ぶ物音こそ含まれていないものの、読者に老婆の死の場面を生々しく連想させる。この奇怪な物音は、あたかも物故した老婆の呪いのような印象を与える。フィレンツェの騎士は、明らかに何か不健全なもの、つまり漠とした死臭を感じとっている。この不可思議な現象は、他の購入希望者にとっても城の所有を無意味にする。城は、ここに到って外観の美にも拘らず、かつての象徴的な価値を完全に喪失している。

侯爵は、財政を建て直すことによってかつての権勢と威光をとりもどそうと考えている。その際、彼の居城はきわめて重要な資産である。彼の意識は、常に権力を志向している。フィレンツェの騎士の報告は、侯爵にとって大きなショックであるが、彼は目的のために是が非でも城を売り払わねばならない。彼は、目的のために常に合理的に発想する。フィレンツェの騎士の件以後、多くの買い手が尻込みし、奇しくも家僕の間にも幽霊騒ぎが噂にのぼるようになる。侯爵は、かかる状況を苦々しく思いささかの不安を感じつつも、事実を解明するために自ら調査に赴くことを決意する。彼は、自己の強い目的意識に依拠して、合理的で理性的な発想を持続している。

——; es war, als ob ein Mensch sich von Stroh, das unter ihm knisterte, erhob, quer über das Zimmer ging, und hinter dem Ofen, unter Geseufz und Geröchel niedersank. (s.197)

(訳)

あたかも何者かが、ガサゴソと音を立てて藁から起き上がり、部屋を斜めに横切り、暖炉の後でゼイゼイゴロゴロと咽喉を鳴らしてくず折れたかのようにであった。

侯爵は、調査の結果不可解な物音を確認して激しく動揺する。この原文引用は過去形で叙述されており、内容的にはフィレンツェの騎士の報告とほぼ合致している。フィレンツェの騎士は、怪音を立てる主体を何かあるもの—etwas—と扱っているが、侯爵は、何者か、つまりある人間—ein Mensch—と理解している。ここが、侯爵と騎士の受けとめ方の決定的な相違点である。フィレンツェの騎士は、この怪音からできるだけ早く遠ざかろうとする。他方侯爵は、この怪音と対決しようとする。侯爵は、怪音の主体をある人間と認識することによって、不安をおぼえながらも不可視の敵と闘いを始めている。この引用も老婆の死の場面を彷彿とさせるが、侯爵は騎士とは異なり全く死臭を感じない。彼は老婆の件をすっかり忘却し、今でも城の象徴的な価値を信じ切っている。

侯爵は強い目的意識をもっているが、かと言って内心の不安を抑制することはできない。彼は妻に報告を求められた時、「おづおづとした不安の眼差しであたりを見まわし、戸口に鍵をかけた後」<sup>(16)</sup>で、真相を説明する。しかし彼は、フィレンツェの騎士のように取り乱してはいない。彼の目的意識が、不安に領された内面を微妙にコントロールしている。他方彼の妻も、驚いたものの夫の合理的な対応を容認し、「真相を公けにする前に、自分と子ども立ち会いの上でもう一度冷静な調査に委ねてもらえないか」<sup>(17)</sup>と進言する。侯爵夫妻は次の夜忠実な家臣とともに調査を行うが、三人が同じ現象を確認する。夫妻は身の毛もよだつような恐怖をおぼえたものの、「売り値はいくらであろうとも、ともかく城を手放したいという切実な願望」<sup>(18)</sup>から、家臣の前で辛じて恐怖を抑圧する。彼らの不安は極に達している。彼らは、これまで直接間接この現象を3回経験している。しかし彼らは、この奇怪な物音が女乞食の件によって説明できるということに一向に気づかない。<sup>(19)</sup>侯爵は、例の件をすっかり忘れている。夫人は元来 „Mitleiden“ の人であり、老婆の死に意識の上でも全く関与してい

ない。そのために、女乞食の死は彼女の脳裏に浮んでこない。夫人は夫に対する同情の念から、表向き夫に従っているだけである。夫妻の意識は表面上一致しているように見えるが、内的には全く孤立しているのである。

### III

人気のない部屋で深夜目に見えない何かが杖をついて起き上がり、部屋を横切って暖炉の後へ行ってそこで呻き声をあげて倒れる。これは、全く不可解な現象である。これを最初に経験したのは、フィレンツェの騎士であった。この報告は、かつての老婆の死を想起させる。この時点で城は悪霊にとりつかれ、かつての象徴的な価値を失っている。しかし侯爵は、騎士の報告をまともに受けとめない。彼はその後2度もこの怪音を経験するが、その原因がわからない。権力意識が強いために、侯爵は城を手放すことによってかつての力を回復することだけを考えている。そのためには、どうしても原因を解明しなければならないと、彼は一貫して考えている。しかし彼の不安は大きく、また不可視の現象を解明する手立てはない。侯爵はそれにも拘らず、「真相をつきとめるために」<sup>(20)</sup>、今度は銃と剣とを携えて飼犬まで連れて妻とともに調査に赴く。

——; jemand, den kein Mensch mit Augen sehen kann, hebt sich auf Krücken, im Zimmerwinkel empor; man hört das Stroh, das unter ihm rauscht; und mit dem ersten Schritt: tap! tap! erwacht der Hund, hebt sich plötzlich, die Ohren spitzend, vom Boden empor, und knurrend und bellend, grad als ob ein Mensch auf ihn eingeschritten käme, rückwärts gegen den Ofen weicht er aus. (s.198)

(訳)

人の目に見えない何者かが部屋の隅で杖をついて立ち上がり、ガサゴソという藁の音がした。タップタップという第一歩で犬は目をさまし、耳を立てて突然床から起き上がり、まるで一人の人間が自分の方へ歩いてくるかのように、うなったり吠えたりしながら暖炉の方へ後じさりした。

この原文引用は、全て現在形で叙述されている。そのためにわかには緊張が高

まってくる。怪音を発する主体は、誰かある人—jemand—と記述されている。そしてガソゴンと藁を踏む音がする。しかし、呻きながら倒れてしまう件りはここには描写されていない。これまで怪音の主体は、呻き声をあげて倒れていた。しかしここにおける怪音の主体は一見老婆と関連しているように見えこそすれ、全く別人のような勢いを感じさせる。それに面白いのは犬の反応である。この犬は、たまたま鎖を解かれて部屋の前にいた。夫妻は、これを連れて入室した。犬はじっと床に寝そべり目を閉じていた。ところがこの怪音とともに目をさまし、そして暖炉の方へ後じさりする。犬の目には明らかに怪音の主体が見えているのである。これは、とても不気味で不可思議なことである。犬の反応は、怪音が部屋の中にいる、人間の目に見えない誰かある人に由来するに違いないことを証明している。<sup>61)</sup>

侯爵の目に見えない敵との闘いは、ここでクライマックスを迎える。彼は剣を抜いて、「『そこにいるのは何者だ』と叫び、返答がないので、狂人さながら剣で虚空を切りまわして」<sup>62)</sup> しまう。侯爵は、ここに到って完全に理性を失ってしまい、まるで狂人の状態である。銃や剣は、見えない敵を前にしていかなる意味をもなしていない。彼の権力は、ここで無に等しくなっている。運命の„Gewalt“ は、彼の権力とそれに端を発する合理的な発想を徹底的に否定している。今の彼は全てを失い、まさに裸の王様同然である。権力も地位もまた権力の象徴も、目に見えない敵を前にして存在しないに等しい。これは、侯爵にとって塗炭の苦しみである。彼の努力は悉く水泡に帰し、城が象徴的価値を失っていることを彼はやっと理解する。これは、まさに絶望の極である。絶望の深淵が、ガッポリと大きな口をあけて彼を飲み込もうとする。侯爵は、絶望の深淵の前で全く無力である。彼は、恐怖のあまり度を失ってローソクをとり、「四壁板張りの部屋の四隅に、自分の人生に倦み疲れ、火をつけて」<sup>63)</sup> しまう。これは、侯爵の権力と発想の自己否定であり、必然の結果である。侯爵は、苦痛に満ちた悲惨な死をとげる。

侯爵夫人の対応は、夫のそれとは異っている。彼女は、犬の反応を見た時当惑し、「総髪を逆立てて部屋の外へとび出し」<sup>64)</sup>、荷物をまとめて町へ逃げ出そうとする。彼女はこの時、はっきりと死臭を感じとっている。彼女のこの対応は、決して不可解ではない。彼女は貴族であるにも拘らず、もともと貴族意識を超越している。彼女は、権力や地位に全く固執していない。彼女はまた、老婆の死に一切関与していない。彼女にとって、目に見えない敵と闘う必然性は

ないからである。彼女は一時理性を失うものの、城が火炎に包まれているのを見ると冷静さをとりもどし、夫を救出するために尽力する。彼女は、“Mitleiden”の人であり、彼女の発想は運命の“Gewalt”によって否定されていない。

当該作品には、冒頭から死臭が漂っている。病身の老いた女乞食が寝ている姿は、真近に迫った死を予感させる。彼女が横になっている藁の床は、臨終の床である。侯爵はこの状況に気づかず、女乞食の死期を早めている。彼の行動は“Gewalt”であり、また不覚の過誤である。彼の“Gewalt”はやがて運命の“Gewalt”と化し、彼は象徴的な価値をもつ居城を手放さざるをえなくなる。これは、彼の価値観と発想の否定である。この時、彼の運命は決定されている。運命の“Gewalt”は、一步ずつ着実に彼のところへ迫ってくる。彼は、客人の騎士の報告をうけその当惑の様子にかすかな不安を感じはするが、自分の発想に固執する。女乞食は杖をすべらせて転びしたたかに腰をうつが、奇怪な現象の叙述においてこの部分は省かれている。自ら直接確認した現象は、本来なら侯爵に老婆の死を連想させるはずだが、彼は自己の発想を絶対化しているために、それに気づかない。老婆の死の場面と奇怪な現象の叙述、つまり本稿中の全ての原文引用において、ガサゴソと藁を踏む音が描写されている。ここに注目して作品を読むと、この音が耳になってしまう。ガサゴソという繰り返される藁を踏む音は、死神の足音のように思われる。藁の床は臨終の床であり、藁は病人の死後今日でも野原で焼かれる。<sup>25</sup> 侯爵の居城の一室には、常に目に見えない藁床が敷かれている。城は、病人の死後目に見えない藁とともに焼き払われる運命にある。そしてその病人とは、心の病に冒された侯爵自身である。これは、運命の“Gewalt”の報復である。侯爵の“Gewalt”は、運命の“Gewalt”によって否定される。侯爵は、苦しみの多い不幸な死をとげるが、原典では“umkommen”という語で彼の死を叙述している。この語は、不幸な死を意味する。<sup>26</sup> 女乞食の死が短く苦痛の少ない死であるのに比し、侯爵のそれは、長く苦痛に満ちている。そして「侯爵の白骨は、村人達に拾い集められ、彼が女乞食に立てと命じた部屋の一角に今でも安置され」<sup>(27)</sup> ている。侯爵は、苦境から脱するために必死の努力をしたにも拘らず、皮肉なことに最もネガティブな形で最も強く城と一体化している。城は、まさしく侯爵の墓場になっている。

## 註

- (1). H.v.Kleist: WERKE UND BRIEFE (以下 Kleist と略記), C.Hanser Verlag München 1977 Bd.2.s.906
- (2). E.Staiger: Meisterwerke deutscher Sprache, Deutscher Taschenbuch Verlag München 1973.s.90
- (3). Staiger, a.a.O., s.102
- (4). H.Kraft: ERHÖRTES UND UNERHÖRTES, W.Fink Verlag München 1976 s.101
- (5). Kleist, a.a.O., s.196
- (6). ebenda.
- (7). ebenda.
- (8). H.Kraft; a.a.O., s.102
- (9). HANDWÖRTERBUCH DES DEUTSCHEN ABERGLAUBENS, WALTER DE GRUYTER & CO BERLIN UND LEIBZIG 1927 Bd.I.s. 1199
- (10). H.Paul: Deutsches Wörterbuch, Max Niemeyer Verlag Tübingen 1966. s.434
- (11). E.Werlich: „Kleists, Bettelweib von Locarno ‘Versuch einer Aufwertung des Gehalts‘“, WW 15.s.242
- (12). Kleist, a.a.O., s.196
- (13). E.Werlich, a.a.O., s.245
- (14). DUDEN: Das große Wörterbuch der deutschen Sprache, Duden Verlag. Bd.6.s.2769
- (15). Kleist, a.a.O., s.196
- (16). ebenda.s.197
- (17). ebenda.
- (18). ebenda.
- (19). E.Werlich, a.a.O., s.242
- (20). Kleist, a.a.O., s.197
- (21). E.Werlich, a.a.O., s.250
- (22). Kleist, a.a.O., s.198
- (23). ebenda.

(24). ebenda.

(25). HANDWÖRTERBUCH DES DEUTSCHEN ABERGLAUBENS,  
a.a.O., s.1199

(26). DUDEN, a.a.O., s.2672

(27). Kleist, a.a.O., s.198